一九三五年に陸軍飛行学校として創設された基地の敷地内に、二〇〇年以上の年月を経て有人宇宙連絡船用の着陸場が建設された。スペースコロニーの完成にともない各国で大規模な移住計画を実行し、地球の人口減少により国内外の航空運送事業が必要最低限まで縮小。既存の空港に宇宙船用の設備が増設される。地方の航空自衛隊基地に宇宙港があるのも同様の理由だ。

ただし、自衛隊基地内の施設を使用できるのは国家・地方公務員に限られ、熊谷ベースに降り立った乗客（パッセンジャー）は、地球での勤務期間を終えた職員たちの交替要員がほとんど

だった。彼らはみな機動性と通気性を重視した青い作業制服を着用しており、背広を着る風習が廃れて久しい。

職員たちは着陸後に基地内で保安検査員との手続きを済ませ次第、係員の指示に従い旧ＪＲ高崎線上で運行する定期便に乗り、各勤務地に赴く。しかしこの日は定期便行きの列から外れ、出入り口用のゲートを探し始める男が現れた。その男だけはほかの職員と異なり私服姿で、古びたキャップとフード付きのアウターは、長身なのも相まって集団のなかでも特に浮いて見える。

そんな異変に気づいたのは若い女だった。最近配属されたばかりの係員は、眉根を寄せながら男に小走りで近寄り、声をかけた。

「そこの帽子の人。先にこちらで手続きを済ませてください」

自分に向けられた声を男は無視した。係員は苛立った様子で男との距離をつめると、相手が背負うフレームザックから伸びるパラコードストラップを引っ張る。ようやく振り向いた男は眠たげな目をしているが、迷惑そうな態度を隠さず、なんだよと気怠げに答えた。鋭利な視線と無精髭は、野生動物を連想させる風貌だった。

「手続き、まだですよね」

「保安検査はもう済んでるぞ」
「定期便に乗るんでしょ」
「乗らねえよ」
「えっ」
「オレは東京行きの役人でも農場（ファーム）行きの作業員でもねーから」
「交代じゃないなら、なぜさっきの便に乗れたんですか。これは地球勤務職員用の」
「向こう（コロニー）で雇い主が勝手にねじ込んでな。就労ビザと委任状、搭乗許可証と全部揃（そろ）ってるぞ」
「民間人が介入できるなんて……そんな特例、聞いたことない」
ふたりが口論していると、列をさばいていた別の係員が駆け寄ってきた。
「はいはい。悪いけど、ちょっと端末見せてもらえるかな」
「主任」
係員たちの上下関係を察知したらしい男は、素直に携帯端末を差し出す。旧式の携帯電話を彷彿（ほうふつ）とさせる液晶画面に、公的文書が表示される。主任と呼ばれた初老の係員が手慣れた様子で画面を何度か操作し、文面を確認していく。

「えー、クマガイさん、ね。はい、はい……はい。内容に問題ありませんね。ただね、この辺はもう公共交通機関が機能していないんですよ。定期便もセキュリティーの都合上、一般の方は」
「そもそも乗るつもりないから。もういいだろ」
「うーん。……まぁ、無理そうなときはさっさと引き返してください。復路もここが指定になってるようですし」
「どーも」
ゲートの位置を確認した男は肩をすくめながら背を向ける。遠ざかっていく姿を見送る主任に対し、先に対応していた係員が頭を下げる。
「すみません」
「いいよ、さっきのはかなりのレアケースってやつだから。彼が出してきた許可証だって形骸的なもので、よくもまぁ拾ってきたもんだよ。関係筋が絡んでるのかもね」
「でも、いいんですか。このあたりを身ひとつで行き来できる場所なんて……」
「これ以上はおれたちの管轄外だよ。本人も構うなって言ってたろ。あの感じだと、それなりに重力や地球の歩き方も心得てるみたいだし」

おれも久しぶりだよ、ああいう放浪者（ノマド）は。主任は誰に聞かせるでもないような調子で一言残すと、早々に列の整理へと戻っていった。

イレギュラーな放浪者――クマガイはすでに宇宙港のゲートをくぐり抜けている。係員はゲートの方向を見やり、そのまま空を仰ぐ。肉眼では確認できないものの、彼女の視線の先には、月と地球のあいだにある重力均衡点（ラグランジュ・ポイント）にて構築された、別の営みが存在する。そこに浮かぶスペースコロニー群出身である係員の地球任期期間は、あと一年以上残っていた。

☆

男がひとり、風が吹き荒（すさ）ぶ関東平野を歩いている。彼が搭乗（とうじょう）していた連絡船の乗客もとい職員たちは、すでに各々（おのおの）の目的地に到着する頃合いだった。天然の日差しと湿度、そして重力。スペースコロニーでは無縁の不快指数が男のなかで上昇していく。

「あー、しんど……やっぱダメ元でも『乗せろ』ってゴネるべきだったかぁ」

ブツブツと文句を言いながら、宇宙港で単独行動に舵を切ったクマガイは線路沿いを

進む。腕時計型ウェアラブル端末で推奨された最短ルートとは異なるが、このまま進めば目的地に着くというわかりやすい指標を優先した。

国道一七号線と旧ＪＲ高崎線のあいだを歩いていると、遠くから微かにエンジン音が響いてきた。ガソリン車は骨董品となり久しい。内燃機関非搭載のＥＶ車が主流となっているのはコロニーも同様だが、クマガイの耳に届く音は、旧式の電気モーターを思わせた。

本来であれば走行音が静かなのがＥＶ車の特徴だったが、ほかに走行音がしない野外では十分すぎるほどの存在感を醸し出している。クマガイが振り返ると、青いバイクスーツが目を惹く電動二輪車が、国道を市街地方面に向かっていた。クマガイはとっさに右腕を高く上げ自分の存在をアピールするも、バイクは無情にも視界から遠ざかってしまう。

「くそ、こんなとこひとりで歩いてる人間無視するかよ」

貴重な足を逃し悪態をついていると、今度は手首に巻いた腕時計型の端末から呼出音が鳴り響く。甲高い電子音と、画面に表示された名前にクマガイはため息をついたが、ホログラムによるビデオ通話モードを拒否しながら応じた。

『――おお、やっと繋がった』
「ハタケヤマさん、到着時間は伝えてただろ」
『それに合わせて連絡したのに通じなかったんだよ。顔出てないけと、電波障害か』
「コロニーと地球の片田舎じゃこんなもんだろ」
『ま、無事到着したんならいいが』
スピーカーからは高齢男性――今回の雇い主の声がする。たしかに宇宙港で一度着信があったが、クマガイは意図的に無視していた。とぼけた態度の意図に気づかない雇い主は、しわがれた声で続けた。
『地球は久しぶりなんだろ、どうだ』
「しんどい」
『金は奮発してんだから、それに見合った仕事してくれよ』
じゃあまた、と通話相手が言い終える前にクマガイは通話を切りあげた。宇宙港に着いた時点で雇い主にも通知は届いているが、以降は定期連絡を入れなければならない。報告義務と言われたら拒否はできないものの、そのわずらわしさにクマガイは苛立ちを隠せない。

「そりゃあ、もらうもんはもらってるけどよ。そもそも相場もなにもない仕事で、どう金額に見合うって判断すんのかね」

通話を終えた端末を操作し、地図アプリをあらためて確認する。推定到着時刻は一時間後と表示されていた。文句を重ねながらも、クマガイは宇宙港を出てから一度も歩みを止めていない。

長年紫外線を浴び続け、経年劣化で色褪せた廃墟や広告の看板が立ち並ぶ。途中、やけに発色のいい看板が現れたと思えば、それはスペースコロニーに移転したという質屋の広告だった。クマガイの進路には、現状すれ違う車輌や人の姿は一切存在せず、途中野生動物の死骸が転がっているような有り様だった。彼が視線をずらすと、車道の脇で朽ちた鹿の死骸を、真っ黒な鳥たちが鋭利なくちばしでつついている。

「ここはカラスしかいねーなぁ」

そんな光景に怯えることなく、クマガイはひたすら歩き続けた。

☆

二〇九九年　世界初軌道エレベーター完成。
長年の課題となっていた、強度のあるケーブル素材の開発に成功したのち、一気に施工が進んだ。日本国内でも総合工事業者（スーパーゼネコン）を中心に、インフラ開発の一環として研究に貢献している。
二一一二年　宇宙空間における輸送機関の確立。
さらに主要都市各地に巨大3Dプリンタの建設が完了したことにより、宇宙移住計画の要（かなめ）となる、スペースコロニー建設計画を本格的に始動させる。
二一一五年　人類初のスペースコロニー完成。
温暖化、海洋・水質・大気汚染、森林破壊といった、五大環境問題による地球環境の悪化を憂（うれ）いた人類は、宇宙に新たな居場所を求め、トーラス型――一九七五年にアメリカはスタンフォード大学にて設計された、ドーナツ型コロニーを指す――を完成させたのだった。
なお、この時代において各主要国は軒並み人口減少傾向にあり、関係各所から選出された人員による初期移住は、実質人体実験の意味合いが強かった。ゆえに、第一次民間人コロニー移住権の獲得倍率は、当初予想されていた数値よりも低かった。

最初期に懸念されていた、スペースコロニーの居住地としての安全基準が確立した現在では、地球の環境問題に関するさまざまな観点により、世界各国から宇宙移住のニーズが高まっている。日本も例に漏れず、地方の田舎町からも移住希望者が途切れない。もはや帰省の意味は、地球へ旅行することになって久しい。そしてスペースコロニーで生まれ育ち、地球の大地を一度も踏まず死に至る人間の存在も観測され始めた。

一方で医療技術の発展にともない、日本国内の平均寿命は一時期一〇〇歳を越えたものの、宇宙放射線被爆による疾患といった、宇宙空間ならではの新たな問題が発生している。高度医療社会を掲げる日本の政策と、宇宙開発事業のスピード感が、必ずしも一致しない事例のひとつだった。

以降、スペースコロニーの新規建設と並行し、月を新たな移住先とする計画が各所で囁かれている。しかし、月面上の領土区画問題が足枷となり、宇宙開発で躍進する国々が保有する月面基地や、研究施設以上のものはまだ着手の目処がついていなかった。

Saturday, July 01, 2180
5:57 p.m.

熊谷市仲町
旧百貨店跡地付近

空が赤く染まり始めた頃、クマガイは市街地にたどり着いた。ビルや家屋の窓からの明かりがほぼ存在しない上に、点灯する街灯の数が少ない。夜までまだいくばくかの猶予があるにもかかわらず、上空に浮かぶ金星がやけに輝いて見える。

「思ったよりもマシってとこか……でもこのままじゃゴーストタウン化待ったなしだ」

約二時間歩きづめだったクマガイは、人や車輌の気配がないのをいいことに、背中の荷物を下ろして十字路のど真ん中に寝転んだ。国道一七号と四〇七号、そして県道三四一号の交差点を囲うように造られた本石（ほんごく）二丁目歩道橋が、遺跡のようにたたずんでいる。

彼の背にある古めかしいアスファルトは未だ太陽の熱気を帯びているが、とにかく脚を休めるのを優先した。衣類越しに伝わる熱も岩盤浴だと思えば——実際に体験したことはないが——まだ耐えられる温度だった。

クマガイが寝そべる十字路の向かって左側、築一〇〇年を越える旧百貨店の出入り口付近に、大温度計が設置されている。旧式のガラス温度計を模したデザインのメモリは、外気温三八度を指していた。

二〇五〇年代から全国的に平均最高気温が上昇し、埼玉県北部・熊谷市周辺の最高気温は五〇度に迫っていた。その対策として、埼玉県は二〇七八年に荒川桜堤を起点に支柱を建て、人工大屋根を構築するクールシェルター化計画〈すずしいぞくまがやプロジェクト〉を発案。のちに同計画を全国へ広めるため、熊谷市は初期段階の実験場として選出された。これはスペースコロニー移住計画に付随された、地球温暖化抑制プロジェクトの一端を担うものでもあった。

それらが実行されると、埼玉県は真夏の平均気温が三八度まで低下した。しかし、人類初のスペースコロニー移住という夢が現実となったことで、人口流出は止められない。

地球残留を選択した市民の多くは人工大屋根の下で暮らしていたが、熊谷市全域を覆(おお)うはずの大屋根が、新県庁北部拠点の周辺二キロ圏内に留まってしまった。結果、二一八〇年の熊谷市の人口は一万人を割り込んでいる。

☆

うつらうつらとしていたクマガイの視界に、ふたつの小さな影が現れた。

まずは犬の呼気がクマガイの耳に届く。立ち耳やマズルの長さからして日本犬のようなシルエットだが、それにしては体高が六〇センチほどで、芝犬よりもはるかに大きい。黒い体毛に覆われ、鼻口部(マズル)や胸、腹部や前脚にかけては白かった。

黒い鼻の湿り気が頬をかすめ、クマガイは眉を寄せる。ＩＤ記載の首輪が見えなかったら、即座に飛び退いているところだった。

次(つ)いで鈍い機械音。小型カメラのレンズがひとつ目(モノアイ)のようにクマガイを収める。円錐(えんすい)型の白い機体に青い線が引かれ、底面にはキャタピラがついている。スペースコロニーではほとんど見かけない、懐古的(レトロ)なロボットだった。

「なんだぁ……」
『おじさん、なにしてるの』
「うわっ」
合成音声がロボットの内蔵スピーカーから発せられる。クマガイが上体を起こすと、数メートル先から子供が様子をうかがっていた。非熱伝導素材のパーカーを羽織り、顔以外はなるべく露出しないよう、トップスと同素材で製造されたレギンスとハーフパンツを着用している。
その格好自体は現代の地球における一般的な服装ではあるが、右手には白い筒状の装置が握られている。先端を喉元に当てがうのを見やり、クマガイは対話を続けることにした。
「ちょっと休憩してた」
『行き倒れかと思った』
「多いのか」
『昔はけっこういたらしいけど、最近はあんまり。外から人が来るのも珍しいし』
好奇心からか、子供が距離を詰めロボットのうしろまでやってきた。それに合わせて

犬が子供に寄り添うと、慣れた手つきで頭を撫でている。子供――痩せ型の少年だ――が手にしているのは旧式の会話補助装置・電気式人工喉頭で、彼が一言も発さない代わりに、声帯の振動に合わせロボットが代弁していた。

「そのオモチャがスピーカーなのか」

『うん。本当はこっちから声が出るはずなのに出なくて、近所の人が改造してくれた』

「まどろっこしいことしてるな」

『パーツが足りないんだって』

「まともな病院にでも行けばもっと新しいのが」

「おい」

地を這うような声がクマガイを刺す。いつのまに接近していたのか、クマガイと少年のあいだに筋肉質な男が割って入り、その背に少年とロボットを隠してしまう。伸びっぱなしの前髪の隙間から、黒目がちな双眸が現れ圧を放つ。

相手の右手にコンクリートの破片が握られているのを見つけ、クマガイはとっさに後ずさり両手を上げてみせた。

「まてまて。なんもしてないしする気もない」

『イノマタさん、この人は大丈夫。寝てたから起こしただけ』
「なに……」
少年の声に呼応するようにロボットがふたたびクマガイの前に現れ、イノマタと呼ばれた男をなだめるような素振りをしてみせた。少年が人工喉頭以外の装置類を持っていないことから、このロボットにはある程度の人工知能が搭載されており、自律機能があることがうかがえる。
イノマタは周囲を見渡す。そして犬が座ったまま、ことの顛末を見守っているのに気づく。どうやら早合点だったと悟ったのか、コンクリート片を捨て、ばつが悪そうに眉尻を下げた。
「……申し訳ない。一時期強盗や誘拐犯が多かったもので、つい」
「はぁ。オレが不審者にでも見えたのかねぇ」
「すみません、見えました」
「髭面のおっさんが素直すぎんのも不気味だな。で……」
「あ、私はイノマタと申します。彼はサト……サトウくんです」
クマガイは改めてイノマタを見る。服装は少年と同じく非熱伝導素材のインナーにブ

ルゾンとボトムス。全体的に引き締まった体躯だが、腰からふくらはぎにかけて強化外骨格を装着しており、両膝外側に小型の機械を添え、腰、太もも、膝のバンドで固定している。印字されたロゴから、それが一般流通している医療メーカー製であることはクマガイにも見当がついた。しかしそんな装備を要する相手が、接近する気配を察知させなかった——その事実が、彼にある種の不気味さを覚えさせた。

けれども、当のイノマタ本人は緊張が解けたからか、柔和な口調で名乗り、態度を軟化させている。サトウと紹介された少年から好奇の視線もあり、クマガイは温度差に若干の困惑はあれど、とくに態度を変えずに応えることにした。

「クマガイだ。仕事でコロニーから来た」

「そうでしたか。……最寄りの軌道エレベータとなると、大宮からお越しですか」

「いや、宇宙港経由だ。熊谷の」

「えっ。公務員なんですか」

「そんなんじゃねぇよ。『ウソだろおまえが』みたいな顔すんな」

「民間人がシャトルで……そんなルートがあるんですね」

「今回限りの裏技みたいなもんだ」

パンッ

乾いた音がクマガイの耳に届く。今度はなんだと周囲を見渡すクマガイに、サトウが大丈夫となだめる。

『いまのは鳥避けの空砲。この時期は渡り鳥が来るから、夕方になると誰かが撃ってるんだって』

「そんなの効果あんのか」

『一瞬散ってる』

「鳥害や獣害が増えているんですよ」

「ここに来る途中も死んでる鹿を見たな」

「昔は山から出てこなかったんですが、いまでは野良猫より多いらしいです」

大人ふたりが話し込んでいるあいだに日没となり、周辺にちらほらと人の姿が出始めている。日没から日の出までの時間帯を経済活動に充てる〈夜間経済（ナイトタイムエコノミー）〉制度が地球上で推奨されているが、猛暑地帯である熊谷市も例外ではなかった。

「この辺に住んでいるのは残留二世や三世がほとんどですけど、サトはコロニー生まれですよ」
「へぇ。なんでまたこんなとこに」
こんなとこ、とイノマタが苦笑いを浮かべる。対してサトウは答えず、足元のロボットを通して別の問いを投げかけた。
『クマガイさんもコロニー生まれなの』
「生まれはな。だが根無し草でね。ほとんど野宿や車中泊だった」
「ホームレスですか」
「ハスウレスでもあるな。だからノマドワーカーなんてやってんのさ」
二一世紀におけるノマドワーカーは、ノートパソコンやタブレット端末を用いてカフェや電車、飛行機の席で仕事をする人々を指していたが、二二世紀では生活費を稼ぎながら移動し、定住地を持たぬ者を意味する。本来の意味である遊牧民・放浪者により近くなっていた。
作業の機械化が進んでも肉体労働従事者が完全に淘汰（とうた）されることはなく、今回のクマガイのように体力を求められる仕事に就く場合が多かった。

「この町で文句なしに健康体なのは、クマガイさんとトムくらいかもしれませんね」
「トムって、この犬か」
名を呼ばれ、その場で座っていたトムが立ち上がる。イノマタの足元まで移動すると、今度は彼に寄り添うように腰を下ろす。
「老犬ですがまだまだ元気ですよ。トムは匂いや気配に敏感だから、一緒にいれば野生動物と出くわしてもなんとかなるんです。気弱な個体はトムの気配で近づいてこないから助かってます」
「犬と並べられてもなぁ」
「そういえば、仕事はどんなものか訊いても」
「ああ、コロニー暮らしのじいさんから荷物の回収を頼まれた。そのじいさんのじいさんだかが、このへんに住んでたんだとよ……げ」
クマガイの手首から着信音が鳴り響く。あからさまに表情をゆがめる相手に対し、イノマタは無遠慮に指摘する。
「出なくていいんですか」
「面倒なんだよなぁ……はいはい」

『もう着いたか』
「おう。あんたの指示にあったデパート前にいるぞ。いま現地のやつらと話してる」
『おお、それは幸先がいいな。そっちはもう夜だろ。案内を頼めばいいんじゃないか』
「そうだな。そんじゃ」
ハタケヤマからの通信を早々に切ったクマガイは、上着のポケットから端末を取り出す。素早くアプリを起動すると、GPS情報を元に現在地が表示され、あらかじめ登録していた目的地が表示される。彼らが居る交差点から東の方面、県庁舎の裏手にある家屋が立ち並ぶ区域（エリア）の一画を示していた。その位置を確認するなり、イノマタは眉根を寄せた。
「なんだよ」
「その辺りの人たちがコロニーやほかの都市に移住して、いまは空き家ばかりなんです。地球用の別宅として残したけど、結局そのまま放置。というパターンがほとんどで」
「で、お役所のご近所でも犯罪が横行したと」
「強盗は一斉摘発されてもういませんが、金目のものは軒並み回収されてますよ」
「ちぇっ……ま、行くだけ行ってみるか。なんもなかったとしても、報告しねーと残り

の金もらえないし」
『おれも行きたい。イノマタさん、いいですか』
おとなしくしていたサトウが口を挟む。彼からしてみれば、道路の真ん中で寝ていた不審者が、ほんの少しの刺激をもたらすような〈非日常〉のきっかけに見えているようだ。しかしイノマタはあまり乗り気ではないようで、サトウは無言で訴え続けている。
そもそも、このふたりの関係はどういうものなのか。外見に血筋を感じさせる要素はなく、親子ではないことは会話の端々から伝わってくる。クマガイは内心首をかしげるものの、彼の関心はそれ以上続かなかった。
「すぐそばだし、いいんじゃねえの」
「人の気配がすれば基本出てきませんが、たまに突っかかってくる野生動物が住み着いていたりするので、なにか対策したほうがいいですよ」
「じゃあ、なおさらそいつの出番だろ。なあ……」
『トム』
「そう、トム」
少しでも楽をしたい一心でクマガイが少年に加勢したことで、今後の流れが確定した。

道をよく知るイノマタを先頭にサトウ、クマガイと続く。
夜を迎えたことで暑さが和らいだものの、かつて中山道と呼ばれた大通りを進むのはクマガイたちのみ。そんな彼らの背を後押しするかのように、ぬるい風が大通りを吹き抜けていった。